校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

Empathy: エンパシー

新年あけましておめでとうございます。保護者の皆様にはご家族お揃いで、すがすがしい新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。教職員一同、今年も子どもたちの健やかな成長を願って、力を合わせて頑張ります。変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、新年第１号の見出しを「Empathy: エンパシー」としました。「Empathy: エンパシー」は本校の４つの校風「協・優・敬・恕」の「優」、「ＨＥＲＯプロジェクト」の「Ｅ」にあたります。今号では本校の生徒が目指している校風「Empathy: エンパシー」についてちょっと深掘りしてみたいと思います。

英語には共感という意味の言葉が２つあります。それは「Sympathy: シンパシー」と「Empathy: エンパシー」です。両者の違いを理解するために、まずシンパシーについて考えてみます。シンパシーは端的に言うと、相手への「同情」です。例えば「お疲れ様です」という社会人なら毎日使うこの言葉も、「疲れているのに頑張っていますね」という同情の表れ、シンパシーは大変そうな相手を思いやる感情です。

一方、エンパシーは、「相手に自分を重ね合わせ、相手の状況を自分のことのように感じ、理解する」というニュアンスで「同情」よりも「感情移入」という日本語がピッタリきます。

シンパシーは「相手のことを思って」同情する「for you」の状態、エンパシーは「相手と自分を重ね合わせて」感情移入する「with you」の状態とイメージすると分かりやすいかと思います。

そんなシンパシーとエンパシーの分かりやすい例が、昨年大ヒットした漫画「鬼滅の刃」です。主人公の竈門炭治郎（かまどたんじろう）は敵である鬼の過去や鬼になった経緯にまで思いを馳せ、我が事のように心を痛めます。炭治郎の鬼への共感はまさにエンパシーです。一方、「かわいそうに」が口癖のキャラクター悲鳴嶼行冥（ひめじまぎょうめい）が発する「かわいそうに」は同じ共感でも、エンパシーではなくシンパシーです。

また、「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」や「他者の靴を履く　アナーキック・エンパシーのすすめ」の著者ブレイディみかさんはある雑誌のインタビューで「Empathy: エンパシー」について次のように語っています。

オバマ大統領の時代に「エンパシーがないとダイバーシティ（多様性）が機能しない」とよく言われたように、エンパシーは、人種やジェンダーの問題を語るときにダイバーシティとセットで使われることが多い言葉です。しかしイギリスでは、たとえばトニー・ブレア元首相の時代（1997～2007 年）にダイバーシティを推進しようと言いながら新自由主義を強化した結果、貧富という縦の格差が広がる結果となりました。当時のイギリスでは、「ダイバーシティーとエンパシーがあっても社会は良くならない」という空気からさまざまな軋轢が生まれ、結局 EU 離脱にまで繋がりました。そして考え方や信条、意見の違いから、いわゆる Twitter 上で石を投げ合ってるような二項対立の激しい分断が生まれ、３年半もの間、離脱派と残留派が揉めに揉めたわけです。そのときに再び、「やっぱりエンパシーがないと駄目だ」と思い出されてきたんです。

息子がエンパシーについてイギリスの学校で習ったのも、そういう流れの中でのことでした。EU 離脱やテロなどの問題に対峙するためにも、信条やイデオロギーが違う人々の間にこそエンパシーが大事なんじゃないか。そう捉えられ方が変わってきたと感じます。

「Empathy: エンパシー」は、本校の生徒が「一人一人の居場所と幸せを大切にする」ために掲げた校風の一つですが、ブレイディみかさんの話から、これからの変化の激しい社会をよりよく生きるために人として身に付けておくべき資質でもあると思いました。